

補修工事を効率化

首都高 合理的にデータ取得

空港点検業務の効率化を目指すことで、合理的なデータを取得したい考えだ。

首都高技術（東京都港区、小笠原政文社長）、グローバル・インフラ・マネジメント（千代田区、土方健司社長）が共同開発した「空港版インフラドクター」の実証実験が富士山静岡空港約120秒で始まる。業務をシステム化する

ことで、合理的なデータを取得したい考えだ。空港版インフラドクターは、滑走路のひび割れやわだち掘れなどの路面性状が同時に調査できるほか、滑走路の勾配を割り出すことが特徴。技術者不足が進む中、レーザを搭載した移動車両「MMS」（モバイル・マッピングシステム）を走行するだけで取得できる。鉄道と同様、滑走路を使っていない深夜の短い時間帯に効率的に保守点検・調査する必要があるため、導入に踏み切った。



システム）を走行するだけで取得できる。鉄道と同様、滑走路を使っている深夜の短い時間帯に効率的に保守点検・調査する必要があるので、導入に踏み切った。

システムは、技術者の技量に左右されない同一尺度で点検・調査できるため情報に合理性がある。損傷ランクの判

MMSは車両を走行するだけで補修範囲や費用が自動算出できるため、補修計画の精度が向上する

策定につなげることができるといふ。これは予算と発

注業務の平準化につながり、受注する企業にとってもメリットは大きいと期待される。

「（合理化により）労働生産性が向上することで、生まれ

「どこが悪いかを合理的に把握することで予算を投入するため、計画的な補修を行うことにもつながる」と指摘する。

実証実験を行う富士山静岡空港は、コンセッション（運営権付与）制度によって選定した三菱地所・東急電鉄グループが4月から運営を始め

首都高グループはインフラドクターを使い、技術やノウハウを同グループに提供する。同グループがそれをもとに補修費の予算化や工事を発注する。首都高はシステムの導入時期について「実証実験は2020年3月までを予定する。内容を検証しながら開発・改良を経て、導入のタイミングを見極める」といふ。

